

E - 4 熱帯域におけるエコシステムマネジメントに関する研究

(3)地域社会における生態系管理へのインセンティブ導入のための基礎研究

国立民族学博物館

地域研究企画交流センター

阿部健一

< 研究協力者 >

独立行政法人国立環境研究所

生物圏環境研究領域 熱帯生態系保全研究室

奥田敏統・近藤俊明・沼田真也

京都大学大学院

アジア・アフリカ地域研究研究科

内藤大輔

(株)建設技術研究所

杉本龍志

平成14～16年度合計予算額 8,304 千円

(うち、平成16年度予算額 2,599 千円)

[要旨]熱帯林の管理には、国家や市場などさまざまなアクターがさまざまなレベルで関与するが、地域社会が実質的な管理主体となることは疑いない。本研究業務では森林生態系管理(エコシステムマネジメント)へのインセンティブ導入にあたって文化人類学的アプローチからマレーシア農村社会や住民が熱帯林とどのような関係を切り結んでいるのかを明らかにすることを目的とした。現地調査では、森林局による原生林プロジェクト:VJR (Virgin Jungle Reserves Project)が実施されているパイロットサイト(パゾ保護林周辺域)の周囲に居住するオランアスリの人々を対象とした。オランアスリは、歴史的にも今日的にも、マレーシア国の中でもっとも森林との関わりの深い民族とされている。また同地域に居住するマレー系(政治的支配者層)の人々もあわせて調査した。二つの民族集団の比較を通じて、オランアスリの人々の生業構造さらには文化・経済・社会構造における森林の位置づけを比較検討した。その結果、まず農村地域社会におけるマレー地域社会の変化の実態が明らかになった。都市への人口流入の結果、農村地域社会は高齢化・過疎化し、かつての小農によるゴム栽培というマレー農村の特徴は失われつつあることがわかった。この流れの中で、オランアスリの人々の生業構造も、ロタン採取や樹脂採取など森林に強く依存したのから、かつてのマレー農村を彷彿さすような、家族労働によるゴムさらにアブラヤシ栽培と変遷していたことが明らかになった。一方、森林産物採取の占める経済的な役割は小さくなっているが、相対的に文化的意味は比重を増していることも確認された。たとえば、散在する残存林で吹き矢による狩猟が行われていることをしばしば観察したが、これらの活動は経済的理由ではなく文化的理由、すなわちオランアスリとしてのアイデンティティ維持のためと考えられた。エコシステムマネジメントへのインセンティブ導入を図るためにはまず、「森の人」の文化・知識を積極的に活用する政策・制度・環境を整え、健全で自立的な地域社会の形成を促すこと、さらにそれに対し科学的立場からの支援(文化の保全や伝達方法、情報メディアの提供方法、知識の地域社会での共有方法の検討など)を行うことが最も効果的な方法となりうることが示唆された。

[キーワード]オランアスリ、農村地域社会、生業構造、森林産物採取、伝統文化

## 1. はじめに

森林生態系管理のインセンティブを導入するためには、自然科学的アプローチにより得た森林生態系機能の重要性を地域社会が深く理解し認めるとともに、森林生態系管理の主体となる地域社会の社会経済文化的状況を、社会科学的アプローチにより十全に理解しておくことが不可欠である。そのため、これまでに、経済発展を遂げた多民族国家マレーシアで、もっとも森林とのかかわりの深いオランアスリ(Orang Asli)社会を対象に調査を行ってきた。オランアスリはいわゆる「先住民」であり、建前的にはマレー系に含まれブミプトラ(土地っ子)優遇政策の対象であるが、現実には弱者であり、その発言が制度や政策に反映される機会はほとんどなく、社会・経済面においてマイノリティであるといえる。しかし、オランアスリは森とともに生活し、文化を創り上げてきたという歴史がある。森林の文化的機能を踏まえた持続的森林管理を行う上で無視できない象徴的存在である、と考えたのである。基本的に、オランアスリを対象として地域社会と森林のかかわりを明らかにする調査を続行した。オランアスリ社会といっても多様でありその生活戦略も多岐にわたる。これまでは、この多様なオランアスリ社会のなかで、歴史民族的差異よりもおかれている状況の違いに着目した比較研究を目指していた。すなわち、森林局によるVJR(Virgin Jungle Reserves)システムが実施されているパイロットサイト(パソ地域)、国立公園であるTaman Negara(タマン・ネガラ)及び森林認証制度が導入されているBelum地域である。

3つの地域でのオランアスリの社会経済的さらに制度的状況の異同による森林とのかかわりの相違は、これまでの調査である程度の概要は明らかになってきている。そのため、最終年度の今回は他地域での調査は行わず、比較研究の軸となっているパソ地域に集中・限定して行なうことにした。オランアスリ社会の森への依存の実態を、マレー系農村社会との比較により鮮明に浮かび上がらせることを目指した。他の二つの地域での研究は、次のステップとして本プロジェクトが目指す広域化の過程の中に組み込み、より精度を高い研究として実現させてゆきたい。

## 2. 研究目的

地域社会における生態系管理へのインセンティブを導入することを目的として、地域社会における自然資源と地域社会の関わり合いを分析する。特に、マレーシアの熱帯林および周辺域の地域を対象として、森林や地域社会の変遷、地域住民による森林利用の様子、森林がもつ文化的(宗教的)、社会的、経済的な意義と対象地域の社会・経済構造の関わりを、森林にもっとも強く依存するオランアスリの住民と、森林からの乖離が進行するマレー系住民との比較から明らかにすることを究極的な目標とした。

この目的・目標への接近法として、ひとつのオランアスリ集落だけでなく、森林への依存度の異なるしかし同じ地域内の、別のオランアスリ集落を比較の対象とした。オランアスリ社会の中での森林への依存度の強弱の程度の幅をまず明らかにするためである。また継続調査を行なっているオランアスリ集落での調査は、その多面的な生活生業活動の中で、とくに狩猟活動に焦点をあてた。これまでの調査結果から、社会経済文化の全般にわたって森林との関わりが次第に薄くなるなか、もっとも濃く森林とのかかわりが残っているのが狩猟活動であり、象徴的意義に関してはむしろ強まっているとも思われたからである。

そして最後に、オランアスリ社会の森林との関わりを相対化するため、調査対象地域内のマレー系集落で比較調査を行なうことにした。同じ農村地域の集落といっても、マレー系とオランアスリでは森林に対するかかわり方は異なるベクトルを持っている、と感じられた。農村地域で大多数を占めるマレー系住民の意向は、今後のマレーシアの森林政策のなかで大きな比重を占める。マレーシア農村地域全体の森林との関わりをも明らかにすることが目的となる。相対化されたオランアスリ社会はその中に位置づけられることになる。

### 3. 研究方法

調査地域は、引き続き地域情報の蓄積の豊富なパソ地域である。昨年度以来、比較的長期にわたる定着参与観察を行っており、社会文化的情報も蓄積されつつある。上記の目的を達成するために、今回は、狩猟活動に焦点をあてて、昨年度と同じオランアスリ集落(ネグリ・センピラン州ジュレブ県アイル・バニン村[仮名])での定着参与観察を継続するとともに、あらたに別にオランアスリ集落(同県ウル・ラマイ村[仮名])とマレー系集落(同県ラマイ村[仮名])をそれぞれ一つずつ選び短期聞き取り調査を追加した。さらに、先住民局、森林局、連邦国土調整局(Federal Land Consolidation and Rehabilitation Authority:FELCRA)、ゴム産業小農開発庁(Rubber Industry Smallholders Development Authority:RISDA)などの政府機関での聞き取り調査や村の開発に関わる資料収集も行った。

アイル・バニン村での調査は、2004年6月から11月まで、参与観察と基本的資料となる世帯調査をまず行っている。世帯調査における質問項目は、世帯構成から親族関係、学歴、生業、所有耕作地面積、結婚、宗教、電気・水道・電化製品・自動車・バイクの有無、狩猟採集(頻度、種類、場所など)である。狩猟採集活動における調査は、可能な限り狩猟採集に同行し、観察、記録を観察、記録を行った。獲物の重さなどはバネばかりを使い計量した。さらに狩猟の場所はGPSで計測し記録している。

短期間の聞き取り調査では、基本的にアイル・バニン村での所帯調査と項目を重ねた。狩猟を中心とした長期定着調査は研究協力者の内藤が、同じ研究協力者でオランアスリ研究の実績の豊富なコリン・ニコラスの協力をえて行っている。また別のオランアスリ集落とマレー系集落の調査は、阿部と内藤が共同で行なった。

### 4. 結果

オランアスリの生活の概要を明らかにするために、調査はアイル・バニン村とウル・ラマイ村で行ったのでそれぞれの村の成り立ちや特性から森林との関わりなどについて比較を行った。ここでは世帯調査の分析ではなく、聞き取りや参与観察を中心とした調査結果を示す。

#### (1)アイル・バニン村

##### 村の概要

調査をおこなったアイル・バニン村(仮名)はネグリ・センピラン州、ジュレブ県に位置する。ネグリ・センピラン州は、マレー半島を貫く中央山脈の南の縁に位置しており、平野部の大部分は開発の対象となり、ゴム園、アブラヤシ園などに転換され、丘陵部分に森林保護区として断片的に森林が残されている。ジュレブ県はネグリ・センピラン州の北部に位置しており、南部に比べると比較的森林が残されている地域である。

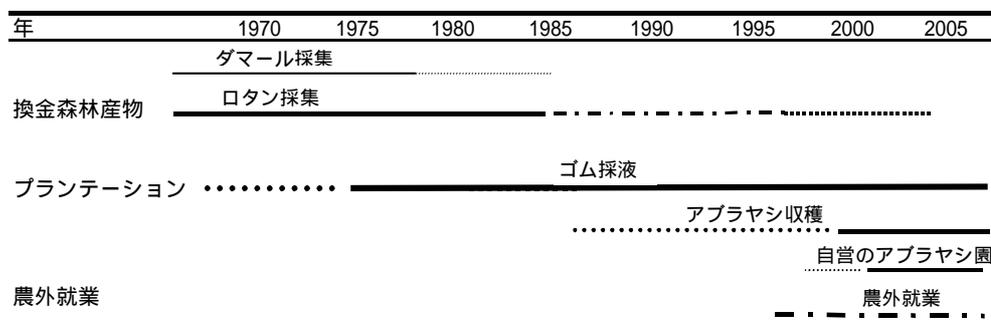
アイル・バニン村は、ゴム園、アブラヤシ園に囲まれた村である。アイル・バニンという村の名称は、近くの川の名前でもあり、バニンBaning(*Cistudo amboinensis*)というカメがたくさん捕れたために名付けられた。村の面積は、250エーカー(101.17ヘクタール)あり、そのうち約半分の125.5エーカー(50.79ヘクタール)を政府系開発機関である連邦国土調整局(FELCRA)によって運営されているアブラヤシ園が占めている。村の中央をプルタン川が流れており、生業にも重要な場所である。周りの地域に比べ少し低くなっており、雨期に大雨が続くと、ゴム園、アブラヤシ園は水に浸ってしまうほどである。調査村周辺の森林地域としては東にパソ森林保護区、西にクランガイ森林保護区がある。これらの森林はフタバガキ科の樹木を中心とした低地熱帯林である。1970年にパソ森林保護区南西部において実験林が設定され、熱帯林研究の場となっている。アイル・バニン村は、31世帯からなり、男性87人、女性79人、計166人が居住している。調査村の大多数

を占めるのはトゥムアンの人々で、他のオランアスリのグループからはジャクン3人、スムライ3人が婚入している。またインドネシア出身が2人おり、結婚により移住してきている。夫または妻の出身村へ数ヶ月から数年毎に行き来している世帯や出稼ぎに出かけている人もこの数に含まれているため、普段の人口はこの数値よりは少なくなる。調査村の年齢分布を見てみると、オランアスリ全体においても全般的な傾向ではあるが、高齢者が少なく、青年が多い。男性においては50才以上が2人、女性で4人と計6人のみであった。

### 生業全般の現状

アイル・パニン村において、1960年代、1970年代はロタン採集などの換金森林産物採集が主な現金収入となっている。この時期にゴム植林が始まり、1980年代に入ると、既にゴム採液による経済的な収益があるため、ロタン採集への依存度合いが減ってきた。1990年代に入り、1週間から数ヶ月単位の以前と比べると少ない期間となり、それ以降、森林産物採集からの収入は、村の人々にとって副次的な収入となっている。

表1 生業の変遷



聞き取り調査から

現在は、ゴム採液、アブラヤシ収穫を生業にしている人が81%を占める。このなかには、自営ゴム園において採液を行っている人も、政府系のゴム園で採液作業を行っている人、マレー人や華人の所有しているアブラヤシ園の実の収穫をしている人も含まれている。実際には生業は、ゴム採液だけでなく、アブラヤシ収穫もおこなうというように複合的であるので、まとめてゴム採液、アブラヤシ収穫として分類した。農外就業としては、スランゴール州での道路清掃の仕事で、雑草刈り掃除を行っている人が8人いる。全員が15才から27才までの結婚前の独身男性である。過去にも1998年には電気ケーブルの敷設の仕事で10人ほどが行っていた。他には家の建設、工場での仕事、農産物販売、鶏舎での仕事などがあつた。またパソ森林保護区にある調査助手としての仕事がある。現在5人が年間契約で働いており、短期で働いた人を含めると15人に及ぶ。

### 狩猟採集

狩猟採集は、かつては森林内にトラ、クマなど身に危険をもたらす大型動物が多く、重要な食糧を得ると同時に、自分や家族の身を守るために身につけなければいけない技術であつた。森林に入る際には、吹き矢(図1)、山刀の他に、槍も持って入っていた。最近では槍は使われなくなり、山刀さえも持たずに森林に入る人もいる。森林の中で、生き延びることが彼らの誇りでもあつた。森林の動物の変化とともに、人々の森林に対する認識も変わりつつある。

## 狩猟

日常的に森林を利用する頻度が減ったと同時に、狩猟の対象となる野生動物の生態自体も変化している。1960年までは近隣の森林でゾウと遭遇していたというが、森林が伐採されることにより、大型動物を中心に動物自体もいなくなり、シカ、バクなど捕れなくなった動物も多い。現在は狩猟の対象とされる動物は、断片化した森林や河畔林やゴム、アブラヤシ園などにも生息できる動物が多い。狩猟の際、動物の子どもが捕れてしまった場合には、ペットとして飼われていることもあり、村に滞在していた時には、リス、サル、シベット、イノシシが飼われていた。

表2 滞在期間中に捕られた動物

現地名	一般名	学名
Lotong	Dusky Leaf Monkey	<i>Presbytis obscura</i>
Sikah	Banded Leaf Monkey	<i>Presbytis femoralis</i>
Kera	Long-tail Macaque	<i>Macaca fascicularis</i>
Beruk	Pig-tail Macaque	<i>Macaca nemestrina</i>
Babi Hutan	Wild Pig	<i>Sus scrofa</i>
Baning	Hard shelled tortoise	<i>Cistudo amboinensis</i>
Musang Buah	Common Palm Civet	<i>Paradoxurus hermaphroditus</i>
Kondok	Pangolin	<i>Manis javanica</i>
Jawak	Monitor lizards	<i>Varanus salvator</i>
Kandau	Flying Lemur	<i>Cynocephalus variegatus</i>
Tupai Dalik	Red Squirrels	<i>Callosciurus notatus</i>



図1 森の中で吹き矢を使って狩猟をするオランアスリ（内藤大輔撮影）。

狩猟の方法は多岐にわたる。人によって狩猟法に好みがあり、得意・不得意もある。またどのような動物を狙うかによって狩猟法を使い分ける。トゥムアンの人々の利用する代表的な狩猟道具としては、吹き矢(図1)が挙げられ、アイル・バニン村で吹き矢を所有している世帯は21世帯あった。すでに狩猟を行っていない場合や、吹き矢を使えなくても、形見、シンボルとして受け継いでいる世帯も見受けられた。鉄砲も使われるが、もと軍隊経験のあった1人しか持っていない、利用は限られていた。パチンコは、子供から大人まで幅広く利用されている道具で、リス、シベット、トリなど小型の樹上動物を捕まえるとき、またサルなどを

追い立てる時にも使われる。仕掛けワナには様々なタイプのものがあり、畑での獣害を防ぐために、また食用、換金用に動物を狩猟するためにも使われる。吹き矢の利用方法は、竹で作られた吹管のなかに、毒を

塗った矢を入れて、ねらいを定め、吹管に口をあて、勢いよく息を吹きこむと筒先から矢が飛んでいき、獲物に刺さる。獲物は、次第に毒がまわって、身動きが取れなくなり、樹上から落下したところで捕まえるという方法である。サルやリスなど樹上の動物を狩猟する道具として適している。



図 吹き矢をいれた矢筒

吹き矢を使う猟法にはいくつかの種類がある。1人など少数で静かに獲物に忍び寄り、吹き矢でしとめる「ムインタイ *Mengintai*」という猟法、これはおもに森林保護区など大きな森林で行われる。これと対照的なもので、複数でサルを追い込む猟である「マハラウ *Menghalau*」は断片化した孤立林で行われることが多く、犬なども連れ添い、大声をだし、駆け回って獲物を追い込む猟法である。また、夜、寝ている動物や夜行性の動物を懐中電灯で照らして獲物を狙う「ムニュールー・マラム *Menyuluh Malam*」という猟法や、獲物の通り道を見つけて陰に隠れて獲物がやってくるのを待つ「ムヌグー *Menunggu*」という猟法もある。実際に、村の人々がどこで狩猟を行っているのかを明らかにしたく、狩猟場所として利用されている場所をGPSで位置情報を記録し、周辺の環境についても調査した。GPSで収集したデータを衛星データに添付し図3を作成した。

森林保護区は黒線で囲まれた地域、孤立林はゴム園、アブラヤシ園の間に点在する白色で囲まれた地域である。村の人々は、森林保護区のような広い森林「フタン *Hutan* (森林)」と、ゴム、アブラヤシ園内に残された残存林、河畔林「プラウ *Pulau* (島)」を区別している。またゴム、アブラヤシ園でも狩猟は行われる。マハラウ(追い込み猟)は孤立林で行われる事が多く、ムインタイ(忍び足猟)は森林で行われる。孤立林は地名などをもとに、それぞれ名前がつけられていて、狩猟などの集合の際にも、その名前を言えばどこで狩猟を行っているか分かるようになっていた。森林内では、林内を流れる川の名前をもとに場所が分類されていた。

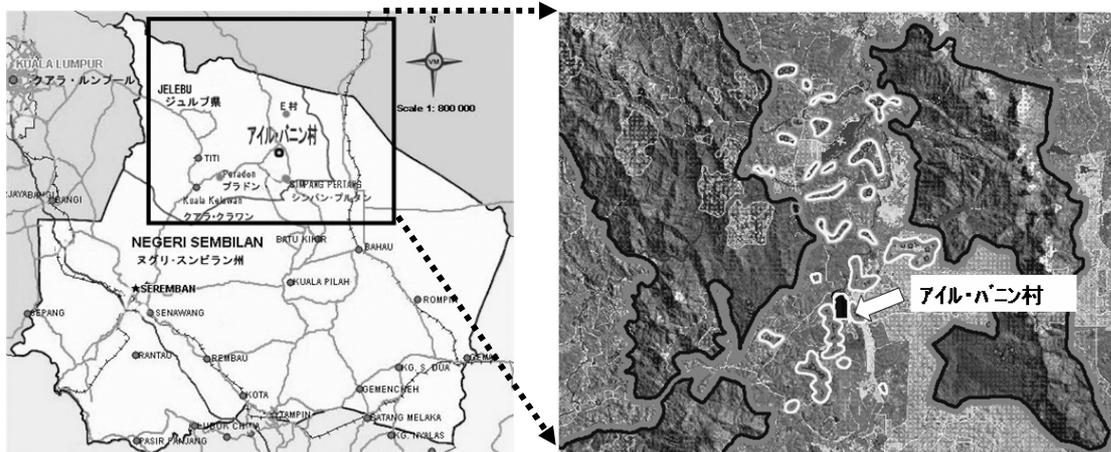


図3. 調査地(アイル・バン村)の位置及び村周辺の狩猟場所(白線で囲まれた地域)。狩猟場所はゴムやアブラヤシなどのプランテーション内に点在する残存林および、二次林を含む森林(黒線で囲まれた地域)である。

狩猟の頻度は人によって様々であったが、1日のうちでも、午前中にゴム採液やアブラヤシ収穫などの仕事を終えてから、午後には狩猟採集へ行ったり、週末や休日に狩猟採集を行うという場合が多かった。一方で、忙しくて最近では吹き矢を使った猟をしていないと答えた家が5世帯あった。狩猟をすることに対して、趣味、

道楽だという人もいた。吹き矢を使った狩猟は、天候や獲物についての情報などにより判断して行われる。

狩猟を頻繁に行うSさんの狩猟日記を整理したものが以下の表3である。Sさん(20才)は、平日は働きにでており、週末によく狩猟に出かけていた。11月はハリラヤ(断食明けの祝日)の連休であり、帰省していた若い男性が多く参加し、毎日のようにマハラウ(追い込猟)へ出かけていた。吹き矢などを使うには高い技術が必要とされ、技を磨く楽しさもある。野生動物との駆け引きなど捕獲までの過程が難しく、捕れた時の達成感は大い。また捕れた獲物を、狩猟した仲間や家族で食べるという楽しみもある。また年に数回であるが、大勢で、パハン州など自然が豊かで、野生動物も多く生息する森林へ行って、狩猟をおこなう、小旅行のようなものも行われていた。

表3 Sさんの参加した狩猟の状況(場所は全て孤立林の名称)

日付	狩猟タイプ	場所	人数	収穫状況
9月11日(土)	マハラウ	Lakai Dua	8	リーフモンキー 1匹
9月18日(土)	マハラウ	Lakai Dua	4	リーフモンキー 1匹
9月22日(水)	ムインタイ	Lakai Dua	4	捕れず
9月26日(日)	マハラウ	Lakai Dua	4	ザル2匹
10月2日(土)	マハラウ	Simpang Durian	6	リーフモンキー 2匹
10月23日(土)	マハラウ	Simpang Durian	3	捕れず
11月11日(木祝)	マハラウ	Pasoh Dua	5	ブタオザル 2匹
11月12日(金祝)	マハラウ	Pasoh Dua	5	オオトカゲ 2匹
11月15日(月祝)	マハラウ	Lakai Dua	8	リーフモンキー 3匹、オオトカゲ 1匹、ムササビ 1匹
11月16日(火祝)	マハラウ	Lakai Dua	9	リーフモンキー 3匹、オオトカゲ 1匹
11月20日(土)	マハラウ	Pasoh Satu	7	捕れず

#### 森林産物採集

森林産物には食用、薬用、呪術用、儀礼用、毒のためのもの等がある。孤立林でも採集できるものと、森林でないとい採集できないものがある。アイル・パニン村では1970年代、食料が十分に得られなく、森林内で取れるTampoi (*Baccaurea sapida*)の実やBangkong (*Artocarpus integr*a)の実を食べて飢えをしのいだという。現在では森林に入る機会が減ったが、山芋やフタバガキの幼葉、ヤシの幼軸の部分など食用植物を見つけると採集し、持ち帰っている。プテイは、マメ科の樹木であるが、実をつけるまでに約3~4ヶ月周期があり、実の熟する頃合を予測し、採集に行く。村で採集する人は主にクランガイ森林保護区かパソ森林保護区へ行ってた。プテイ採りは原則的には早く実を見つけた人が採集してよいことになっているため、実が未成熟であっても採集がおこなわれてた。

表4 調査期間中の食事に出てきた食事の内容

名前	科学名	部位	食べ方
Ceperai	<i>Champereia griffithii</i>	新葉	煮る
Daun semomok	<i>Curcuma</i> sp.	葉	煮る
Jering	<i>Archidendron jiringa</i>	実	生
Kerdas	<i>Pithecellobium microcarpum</i>	実	生
Lankap	<i>Arenga westerhoutii</i>	葉軸	煮る
Meranti	<i>Shorea</i> sp.	新葉	煮る
Paku papan	<i>Cyathea moluccana</i>	葉	煮る
Petai	<i>Parkia speciosa</i>	実、花	生

しかしながら狩猟や森林産物採取は、オランアスリの人々にとって別の意味を持ってきている。彼らのアイデンティティに関わる象徴的な意義だといってもよい。この文化的側面をどう評価するかで、オランアスリの「森林への依存度」の見方がわかる。現在は病院も近くにあるため、薬用森林産物の知識や利用は減ってきて

ている。数種類の薬草を煎じて常用している世帯が2世帯、精力作用のあるトンカット・アリ(Tongkat Ali)や、腰痛用の薬草など、効用に応じて数種類の薬草を混ぜ合わせを販売している世帯が3世帯あった。また吹き矢に使われる毒性植物としてはイポー(Ipoh)が代表的であるが、矢毒を作るためには欠かせないものである。狩猟の頻度にもよるが、数ヶ月に1回、樹液を取りに行く。毒性を高める為に、他にも数種類の毒性植物も併用されている。呪術や儀礼によく使われる森林産物に、クミヤン(kemiyán)と呼ばれる樹脂がある。線香のような香りがし、儀礼には必ずといっていいほど使われ、マレー人の呪術師なども利用している。あまり量が採集できないため、希少価値が高くなってきており、オランアスリ同士での金銭取引も行われるほどである。悪い精霊を追い払ったり、お葬式などの際にも必需品である。天気雨や大雨や雷などを治める為の呪術を使う際にミドゥ(Midu)という幼木も頻繁に使われる。森林保護区は、生活で重要な森林産物の生育、貯蔵の役割も持っている。日常的には利用しなくても、必要となったときにはすぐ採取に行けばよかった。しかしながら、近年は森林の伐採、開発などにより、採集が難しくなっている。呪術師(Bomoh)であるMさんは、伐採によって植物が失われてしまうことを恐れ、自分の所有するゴム園内に有用植物の植栽を試みており、1エーカー(0.40ヘクタール)ほどの植物園を持っていた。しかしながら、森林との環境条件の違いから根付かない植物も多いという。

表5. 採集対象となる森林産物

現地名	学名	効用
薬用植物		
Kacit Fatimah	<i>Labisia pumila</i>	産後に飲む
Mempudu buni	<i>Andrographis paniculata</i>	精力剤
Pokok Midu	<i>Goniothalamus</i> sp.	風邪にきく
Sembelit	<i>Rourea mimoides</i>	腹痛
Tongkat Ali	<i>Eurycoma longifolia</i>	精力剤
Ubi Dawai	<i>Smilax callophylla</i>	精力剤
毒性植物		
Ipoh	<i>Antiaris toxicaria</i>	吹き矢の毒
Tuber	<i>Derris</i> sp.	魚毒
呪術・儀礼用		
Pokok Midu	<i>Goniothalamus</i> sp.	大嵐の時
Kemiyán	<i>Styris</i> sp.	お葬式の時

## (2) ラマイとウル・ラマイ村 マレー系農村とオランアスリとの比較

ここでは、聞き取りによる調査の結果をもとに、マレー農村部社会とオランアスリ社会の社会・生業構造を比較し、その異同と変化過程の中で、オランアスリ社会と森林との関わりを浮かび上がらせようと試みた。

### 村の概要

ラマイ村は、アイル・バニン村から幹線道路をさらに北へ20kmほど行き、支道を2kmほどパソの森林保護区に向かって西に入ったところにある。明るい紫や赤茶色に塗られた高床の家が点々としている。最初の開拓は1935年。村には小学校はなく、幹線道路まで出て、さらに北へ行った町まで通う。ウル・ラマイはそこからさらに奥へ、アブラヤシ園やゴム園を抜け、パソ森林保護区をかすめて森林の中の道を走る。5kmほど走行すると、森が急に開け、ゴム林が現れ、両側に小さな、コンクリートブロックに板張り、トタン屋根の土間式の家が並ぶ。1976年に、県内の母村から数戸が移住して現在に至っている。上流(ウル)の森林の林縁にあるウル・ラマイ村と道路に近いラマイ村の地理的關係は、オランアスリとマレー農民の社会・経済的状

況をある意味象徴的にあらわしている。森へ執着するオランアスリと、森から離れ「近代化」の進むマレー集落である。戸数14戸のウル・ラマイでは悉皆調査を、戸数が100戸を越えるラマイ村では、14戸をランダムに抽出して、聞き取り調査を行なっている。

### 生業構造の比較

すでにアイル・バニン村の調査で示されたように、ウル・ラマイ村での経済活動の主体は現在もゴムとアブラヤシである。ゴムとアブラヤシの栽培を見てみると、14戸中11戸がゴム園を所有していた。ゴム園を所有していない世帯も、戸主が高齢ですすでに子供たちにゴム園を分配してしまった世帯であったり、あるいは村内の身内のゴム園で採取作業を行なっていたりして、実質的には全戸がゴム園に生計を依存しており(表6-8)、植栽が行なわれた当初の1976から、ゴム園以後漸次拡大植栽を行なっていることが分かった。

アブラヤシは比較的新しく、1998年度から植栽されている。8戸ですすでに栽培が開始されているが、ここ2~3年に植栽が盛んになっている。アイル・バニン村と同じく、ゴムからアブラヤシへと経済活動の比重は移行しているようだ。ウル・ラマイでは、それでも、森林に近接するため森林産物への依存は比較的高い。経済的にはロタンが重要である。ゴムが収穫可能になって、ロタンの採取が行なわれなくなる。いまだロタンが経済的に大きな地位を占めているのが一戸ある。また森林内の蜂蜜とプテイも、副次的な、また世帯によっては無視できない、収入源となっている。バイクも村全体で17台、テレビも世帯の半分以上8台ある。経済的には、後述するようにマレー農村の住人には及ばないが、ライフスタイルにおいては、他のオランアスリのグループ、たとえばタマン・ネガラ内で移動生活をおくるバテツの人たちよりも、はるかにマレー人に近いものになっている。

ラマイ村でも、基本的な生業構造は同じである。というよりも、ウル・ラマイに先行している、といったほうがいい。ゴムの植栽は1970年代初頭と早く、すでに2回植え替えを行なっている世帯もある。そして現在ではアブラヤシへの移行が急速に進展している。ウル・ラマイと異なっている点もある。ゴムの植え替えに際して、接木(*kahwin*)や新品種の導入を行なっていること、また除草剤を使用していること、そしてさらに自ら植え替えの作業を行なうのではなく、植え替えそして採取の作業をRISDAに委託して行っていることである。アブラヤシの栽培も、農民が主体的に行なっているのではなく、植え付けから収穫までFELCRAが代行しており、農民が公社に土地を貸し出しているような形になっている。このことは、社会構造とりわけ人口構造の変化と関連している。家族構成からあきらかなようにラマイ村では、子供たちが村に住まず、生活の基盤を村以外のところにおいている。村に残るのは年寄りだけになり、人口の空洞化が進行しているのである。ゴムの採取には日々の労働力が必要である。一方アブラヤシの収穫は、数ヶ月に一度であり、ひとたび植栽すれば、その後恒常的な働力は必要ではない。

マレー系とオランアスリの生業生活の違いの一つに大型・中型家畜の飼育の有無がある。マレーの集落では、牛・山羊・羊の飼育が見られるのだが、この家畜飼育も近年は縮小・減少傾向にある。このことも農村部の労働人口の減少と関連している。マレー農村のここ20年の社会構造の変化は生業構造にも大きく影響を与えている。オランアスリ社会も、この影響から逃れることはできない。この社会構造の変化を端的に顕すものとして、戸主の子供たち、すなわち「次世代」の動向を二つの集落での比較した。具体的には次に示す就職と教育である。

### 社会構造の変化：就職と教育

世帯調査から、次世代がどこで、どのような生計を立てているのかを示したのが、表6(ラマイ)と表7(ウ



表7. ウル・ラマイ村の次世代の動向：就職

	50代		40代		30代		20代	
	男	女	男	女	男	女	男	女
村内								
ゴム園ほか	1	1	1		3	5	8	8
村外								
ゴム園ほか	1	1	3	1				
工場労働者							2	3
その他				1				2

表8 ラマイ村の次世代：最終学歴\*

教育レベル*	50代		40代		30代		20代	
	男	女	男	女	男	女	男	女
大学卒					1		1	1
大学在学中							1	
STPM**				1	2			
SPM***			2		4	2	3	4
高校中退			1	1	1	3		2
中卒					2		6	
中学中退			3	5	4	2	1	
小卒	1	2	1	2	1	3		
小学中退			1		1	1		
未就学				1		2		1

表9 ウル・ラマイ村の次世代：最終学歴\*

教育レベル	50代		40代		30代		20代	
	男	女	男	女	男	女	男	女
大学卒								
大学在学中								
STPM**								
SPM***								3
高校中退								1
中卒								1
中学中退					2		4	2
小卒						1	1	1
小学中退						1	2	1
未就学	2	2	4	1		4	3	5

\*時代によって、教育制度は異なる。

\*\*STPM (Sijil Tinggi Pelajaran Malaysia) 高等教育資格証明書：上級中等教育課程修了

\*\*\*SPM (Sijil Pelajaran Malaysia) 中等教育修了証明書：高卒

## 5. 考察・結論

マレーシアの農村社会はここ20年間で大きく変容してきた。農村社会は変容し、都市化が進行してきている。ゴム・アブラヤシ栽培は、今日でもいまだ主力産業であり、農村部の代表的景観である。しかしその経営様式は、かつての小農が主体であった労働集約的な栽培から公社が主体となった省力的なプランテーションへと大きくかわってきた。農村から都市へと労働力が移動し、農村部では労働力が不足するように

なっている。平成 16 年度の調査では、マレー農村における変化の実態を、マレー系とオランアスリの二つの地域社会を比較しつつ明らかにした。

森林を中心としたエコシステムマネジメントも、当然ながら、この大きな社会経済的構造変化の中で考える必要があり、とりわけ地域社会における生態系管理へのインセンティブ導入を図ろうとする場合は十分考慮しなければならない点である。今回調査対象としたオランアスリ地域社会でも、マレーシア農村部の大規模な生業構造の変化に呼応するように、すでに収入の中心となる生業は、ダマール、ロタンなどの換金森林産物採集からゴム採液、アブラヤシ収穫、道路清掃業などの農外就業へと変わってきている。少なくとも経済活動では、狩猟や森林産物の採取といった活動は重要でなくなってきた。せいぜい副次的な収入源であり、なかば余暇的な活動である。この点で、森林への依存は、かつてほど強くないことも同時に明らかになった。しかしながら狩猟や森林産物採取は、オランアスリの人々にとって文化的・精神的ともいえる別の意味を持ってきているのではないかと思われる。彼らのアイデンティティに関わる象徴的な意義だといってもよい。そして、この文化的側面をどう評価するかで、オランアスリと森林との将来のあり方について見方がかわってくる。

もともと、調査対象であるトゥムアンの人々は、オランアスリのさまざまなグループの中でも、マレー系の最も近いグループである。生業・生活習慣で共通する点が多く、さらにイスラム化が進んだ結果、宗教まで共通するようになってきている。トゥムアンのアイデンティティに関して、信田は(2004)、トゥムアンとオランアスリを分けるのは、精神的に森林に関わっているかどうかである、としている。森林を忌避するのがマレー人であり、それ以外の余集団がオランアスリなのである。オランアスリであることに「血統」すらも要求されない。極端な場合、実際にそのような例が見られるのだが、中国人だろうがインドネシア人であろうが、マレー人には見られない森林との関わる生活を送るかぎりオランアスリなのである。このオランアスリのアイデンティティという視点にたてば、経済的にはさほど重要でない狩猟や森林産物採取の別の側面が浮かび上がる。

狩猟においては、吹き矢などを使うには高い技術が必要であるし、技術を習得し、磨くことは文化的・精神的価値の一つとなっている。野生動物を捕獲するまでの駆け引きも楽しいものであるし、またそれらを味わう楽しみもある。吹き矢を巧みに使いこなし獲物を得ることは、マレー系農民に比べ社会的・経済的劣位にあるオランアスリが誇れる点の一つとなっている。森林に知悉したオランアスリでないと、ゴム園やアブラヤシ園の間に残る孤立林を頻繁に利用し、樹上の獲物を獲得することはできない。オランアスリの世帯に必ずある吹き矢は、「武士の刀」に相当する、といってもよい。同じ狩猟でも、たとえばセンザンコウやカメ・スッポン・蛙など商品価値の高い動物を、吹き矢によらない方法で捕まえるのとは意味合いが違うのである。

一方、森林産物採取も、経済的側面だけの理解は不十分である。かつては樹脂やロタン採取は重要な現金収入源であった。しかし、現在ではゴム・アブラヤシ栽培というより効率的な現金収入源がある。それでも今日森林産物を採取するのはあらたな商品価値が生まれつつあるからとも考えられる。「オランアスリの採取した」森林産物という付加価値である。たとえばオランアスリが採取しているプテイは、元来栽培可能な木であり、実際ジャワなどではごく一般的に庭先で植栽されている。しかし森林のなかから「オランアスリが採取した」プテイは、都市居住者にとって特別、野性味が強く、精力がつく「自然食品」である。蜂蜜にしても、同様で、養蜂家の蜂蜜とは比べ物にならない「健康食品」である。その端的な例が、薬草である。森の精気が濃縮している薬草は、近代化のなかで特別な価値を持ってきた。オランアスリの呪術師のもとには、休みの日になると診断を受け「薬」を受け取るために、疲弊した都市住民が列をなしている。

日常的には、森から、物理的にも精神的にも、乖離してきたマレーシアの人々である。都市化・近代化のなかで、森が生活に占める位置は、先進国の都市居住者と近いものになりつつある。森とは「大切に、残さ

なければならない生態系」であり、時たま訪れる限り「心地の良い自然」であるが、その周辺に住むことは避けたい、存在である。こうした動向のなかで、オランアスリは「森の民」としてのイメージが相対的に強化されている。森林産物に対する根強い需要のなかで、「オランアスリ」が商品化されているともいえる現象がその一つの現れである。このオランアスリに対する外部者のイメージとオランアスリ自身のアイデンティティのよりどころとしての「森の民」 - 現実にマレーシアの国民のなかで、もっとも森林に近いところで生活するオランアスリの人々を、発展と開発の中で森林に取り残され人々としてとらえるのではなく、地域住民へのエコシステムマネジメントのインセンティブを喚起する際に、むしろ貴重な媒介者として積極的に活用する政策・制度が必要だと思われる。森林の保全を行える地域社会は、今日のマレーシアでは、オランアスリ社会しかないのである。

## 6. 本研究により得られた成果

経済的・社会的に周辺化 (Marginalized) するオランアスリ社会は、発展を続ける複合民族国家マレーシアにおいて、国内的な大きな政策課題であった。この課題に対し、従来はイスラーム化政策や経済的な優遇・援助政策により、マレー系への「同一化」を促進させる政策がとられてきた。しかし研究成果は、むしろ、異なるベクトルを示唆するものである。すなわち、後追いする形で多くの都市居住者あるいはマレー系村落居住者との同化を目指すのではなく、むしろ「森の民」として積極的に異化するという選択肢の可能性である。その場合、取り残された「森の民」ではなく、尊厳をもって「森の民」であることを選択すること、そしてそのための社会的・経済的環境を整備することが重要である。その延長線上に、森のステュワードとしてのオランアスリの将来と国家政策としてのエコシステムマネジメントの展開があるのでないか、というのが本研究の成果である。

## 7. 引用文献

(1) 信田敏宏 (2004) 「周縁に生きる人々 - オランアスリの開発とイスラーム化」京都大学学術出版会

## 8. 国際共同研究等の状況

(1) 本サブテーマはマレーシア森林研究所 (FRIM、カウンタパート: Dr. H. Lim) およびオランアスリ研究センター (カウンタパート: Colin Nicholas 氏) と共同で実施した。

(2) 本サブテーマ代表者は下記の専門者会議の日本側代表として出席した。

UNESCO/JCAS Symposium and Experts Meeting “Safeguarding the Transmission of Local & Indigenous Knowledge of Nature”, April 14-15, 2005, Aichi Prefectural University

## 9. 研究成果の発表状況

(1) 誌上発表

<論文 (査読あり)>

なし

<その他誌上発表 (査読なし)>

阿部健一 『季刊民族学』112:13-22(2005)

「多様性に人類学的祝福を - 地域で考える自然と文化 - 」

内藤大輔 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 (2005) 博士予備論文

「マレーシア半島ヌグリスンピラン州における先住少数民族トゥムアンの生業変容」

(2) 口頭発表(学会)

K. Abe 中国社会科学院・総合地球環境学研究所共催, “生態移民：実践与経験” Beijing, 2004  
“Population Movement and Environment in China: Viewed from Tropical Forests in Southeast Asia,”

阿部健一 国立民族学博物館友の会講演会 (2005)

「国立民族学博物館文化・生物の多様性 - 国際的な共通認識のために - 」

(3) 出願特許

なし

(4) シンポジウム, セミナーの開催(主催のもの)

なし

(5) マスコミ等への公表・報道等

なし

10. 成果の政策的な寄与・貢献について

- (1) 近年、森林施策の立案・決定プロセスや森林認証制度の推進に地域住民の視点を取り入れることの重要性が指摘されているが、本研究で掲げる「森と人との関わり」は住民参加型の地域資源管理や地元との合意形成を図る上で必要不可欠な学術情報であり、生態系に配慮した資源管理手法を開発する上で大きく貢献するものと期待できる。また、本サブテーマの親課題で掲げる「エコシステムマネジメント」は、生態系 - 地域社会 - 経済の“調和”を目指しており、人がどれほど森と関わっているかはまさにこうした管理手法の根幹をなすものである。
- (2) 本研究で得られる成果は、関連サブテーマE4(1) や など開発・整備中のGIS情報やそれを元にしたリスクアセスメントツールと融合させることにより、より柔軟な対応が可能な意志決定プロセスを構築することが出来る。また本研究は住民参加型の資源管理を支援・推進し、土地開発などに際しての施策決定プロセスの透明性を高めるうえで貢献する。
- (3) オランアスリ「問題」など先住民に関わる問題は、マレーシアに限らず、多くの地域で政治的にきわめてセンシティブな課題であるが、カウンターパートとのさらなる共同作業を通じ、具体的な制度設計や試験的試みを積み重ね、政策立案者がよりどころとする成果と信頼を得ることが可能である。
- (4) 熱帯林の資源利用と地域住民との間で様々な社会的ジレンマを抱える地域や国での新たなモデルプラン作りやアプローチとして波及効果が期待できる。